



## 「信じる者は救われる」

～信仰とは従順すること～

「しかし、律法を完全に守れる人はいない。だから、キリストを見付けようとして、自分の力で天に上る必要もないし、キリストを見付けようとして、自分の力で死人の中を歩き回る必要もない。キリストを信じれば救われるという神の御言葉は、あなたがたのすぐそばにある。これこそ、私たちが宣べ伝えているメッセージである。」  
ローマンへの手紙10章6～8節現代訳

私たちの信仰ということ进行深入に考えるときに、旧約聖書の列王紀下5章に出てくる「ナアマン大将物語」を思い出します。

ナアマンは旧約聖書時代、北イスラエル王国で、預言者エリシャが活躍していたときに、敵国であったスリヤという国の将軍でした。しかし、ナアマンは軍隊の総司令官でしたが、その武具を脱ぐとその体は、当時の死の病と言われる「ツアラト(らい病)」と呼ばれる重い皮膚病と呼ばれる病に侵されていました。彼の身の回りの世話をしていた召使いの中に、イスラエルから捕虜として連れられてきた娘がいて、彼女が自分の故郷にいる偉大な神の預言者であるエリシャ先生のことを話しました。エリシャ先生ならナアマン大将の死の病を癒してくださるという良き知らせ＝ゴスペル＝福音を伝えました。藁にもすがる思いで、敵国である北イスラエル王国に向かいました。

しかし、ナアマン将軍がエリシャの所に着いたとき、エリシャ自身は歓迎の意を示さず、弟子の一人に出迎えさせます。それ自体にもナアマンは憤慨しましたが、それ以上に、その言葉の内容に当惑しました。なぜなら、泥まみれの小汚いヨルダン川に7回その身を浸せと命じたからです。ナアマンは預言者自身がやってきて、ナアマン自身に手を置いて、手厚く癒しの祈りをしてくれるものと思っていたが、預言者自身も来ず、ただ、薄汚れたバイ菌だらけのような川に身を浸せと命じただけという更なる言葉に怒り心頭、きびすを返して、引き返そうとしました。しかし、彼の部下の中に賢明な人物がいて、こう言いました。「わが父よ、預言者があなたに、何か大きな事をせよと命じても、あなたはそれをなさらなかったでしょうか。まして彼はあなたに『身を洗って清くなれ』というだけではありませんか。」その言葉に納得がいて彼は預言者の言葉に従順し、見事に偉大な神の御業を経験することができたのです。

ある著者がこのナアマン大将物語とプライドとの関係について次のように語っています。“プライドは私たちを神の道から遠ざけます。私たちは条件付きで神を求めます。私たちの考え、好み、状況、そして私たちに得となること、その願いを押し付けながら神を求めてしまいません。そして、最終的に「そのようにお願いします」、「それでは困ります」と言ったりします。

神に完全に従順することは、実は辛く苦しいこと。そのために神の言葉に対して完全降伏することから逃げてしまい、条件付きで求めてしまうのです。” Charles Lehardy